

上野に行つて

2時間で学びなおす

西洋絵画史

山内宏泰

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

上野に行って2時間で学びなおす西洋絵画史

山内宏泰

星海社

33



SEIKAISHA
SHINSHO

目次

プロローグ 西洋美術の入口は、上野駅 5

I 前庭のロダンは、彫刻の「印象派」 13

II 館内で、いちばん古い絵 27

III 「自由」を謳歌する二十世紀絵画 47

IV 十九世紀と二十世紀の絵画をつなぐ「ナビ派」 61

V 後ろ向きに前へ進んだ「ラファエル前派」 79

VI 眼そのものになった人の部屋 89

VII 徹底して「いま、ここ」を描く 113

上野駅
公園口
Station

- VIII 「写実」を突き詰めることこそが、新しい絵画 133
- IX 自分をアピールする自画像 151
- X 画家の地位向上を目指した、英国美術界の重鎮じゅうちん 161
- XI 風景だけを描く 171
- XII ネロとパトラッシュも憧れた、フランドルの才人さいじん 187
- XIII 異端の「キリスト磔刑たつけいず図」 201
- XIV ブリュールゲル一族 211
- XV 「破調はちようの画家」は何を描き出そうとしたか？ 223
- XVI 新しい技法がキリストの涙を生んだ 233

エピソード ふたたび上野駅まで 243

プロローグ 西洋美術の入口は、上野駅

「このたびはご利用ありがとうございます、わたくしが……」

低くよく通る声で、不意にあいさつされて驚いてしまった。でも、

「インディペンデント・アートコンシエルジュの者です。以後、お見知りおきを」

恭しく差し出された名刺を見て、ああそうかこの人が、と納得した。

待ち合わせの場所として指定されたJR上野駅の公園口にたどり着いて、まわりを見渡したときは、それらしき姿が見当たらなかった。

あれ、時間か場所を間違えた？ と一瞬思った。

とにかく改札を通り抜けてみた。目に飛び込む公園の緑をまぶしく眺めやっつてから、駅前の雑踏へと目を戻せば、すぐそこにその人はいた。

いるのは当然といえば当然のだけど。前日、たしかにわたしが申し込みをしたのだから

ら。休日出勤の代休が思いがけず取れて、予定がぼっかり空いた平日の午前中の時間。ぼんやり部屋で過ごしてもよかったけれど、かねて抱いていた好奇心を満たしてみたいと考えたのだった。

アートってやっぱりおもしろい。

学生のころから思っていたけれど、仕事を始めてそれなりにいそがしく過ごしていると、いつそうそんな気持ちが強くなってきた。美しいものに触れるのは単純に喜びだし、すてきな作品を前にすると、いろんなことを考えさせられる。

古い絵を観れば歴史の重みをひしひしと感じるし、肖像画に描かれた表情を覗き込めば、ちよつと大げさだけど人間の存在っていったい何だろうとか、哲学っぽいことまで頭に渦巻く。

一つひとつの画面に、刺激がたつぷり詰まっている。

それでいつしか話題の大型企画展なんかには、暇を見てマメに足を運ぶようになった。展示にはたいいてい目玉となる名作が用意されている。会場で対面すれば華やかさとオーラに圧倒されて、じゅうぶん満足して家路につく。会場を巡る短い時間は、まるで別世界を旅しているようで楽しい。

そうしてアートに触れるのが趣味になっていったのだけれど、いろんなものを観て経験を重ねると、もう少しなんというか、ものごとの全体像が知りたくなってくる。

好きなことはもつと深く知りたいし、味わいたい。長い歴史のなかで育まれてきたアートの流れや見取り図が分かれば、楽しみ方が増えそう。

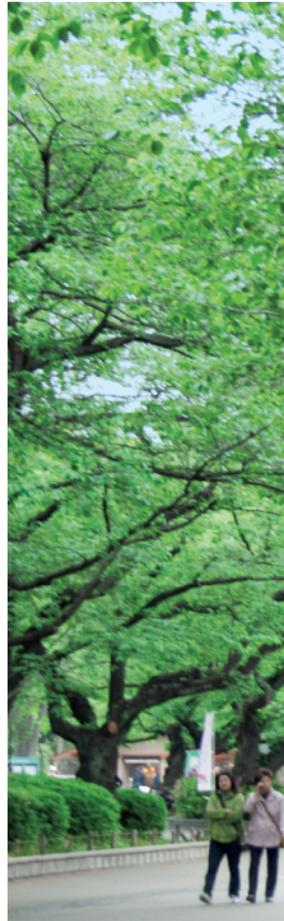
でも。そこまで考えて、わたしはいつも尻込みしてしまう。アートの勉強なんてこれまでもしたことがないし、そもそもアートって敷居が高いというか高尚な世界のような気がして、なんだか気後れしてしまう。

ああ、どこかに気軽に解説をもらえて、分からないことはなんでも質問できる、そんな人はいないかな。いっそエスコートしてもらいながら、作品を観て回ったりできればいちばんいいのに。

「そうお考えのときに、アートコンシェルジュの存在を知っていただけただけなのは幸いです。わたくしどもがご提供できるのは、まさにあなたが思い描いていた体験そのものですよ。当方では、どんなご要望だって承ることができますのでご安心を。」

本日は午前中のひとときだけで、西洋美術をひと通り体験したいとの旨、お聞きしております。無理な注文だったかとご心配ですか？ いえ、ちつとも。もちろん可能です、お





まかせください。

ここ上野なら、じゅうぶん期待に^{こた}えられるかと思えますよ」

感じのいい微笑とともに、彼が右手を少し挙げて指し示す先には、上野公園が広がっていた。平日の午前中というのに、ずいぶんたくさんの人でにぎわっている。

「これはパンダのせい、いえ失礼、パンダのおかげ、ですね」

行き交^かう車や人混みの喧騒^{けんそう}にもかかわらず、彼の小さな声はしっかりと耳に届く。紺色^{こんいろ}のジャケツトを着込んだ竹^{たけ}まいもそうだけど、控^{ひか}え目でありながらちゃんと存在感がある。

「シンシンとリーリーの二頭が二〇一一年に上野動物園に到着してから、人出が何割かアップしました。やはりパンダはいつの時代も人気者ですね。

前代のリンリンが二〇〇八年に亡くなってから、しばらくはパンダ不在^{ざい}だったので、いるといたないとは大違い。一九七二年にカンカンとランランの二頭が初めてやって来て以来、パンダが人を寄せる効果は衰^{おとろ}えないのです。

ただ、上野に人が集まるのは、パンダのおかげだけではありませんよ。むしろ最近なら、目的はアートという人のほうが多いでしょう。

ここ上野の杜もりは明治の昔から、日本有数の「美の殿堂でんどう」です。

公園の敷地内には東京国立博物館、東京都美術館、上野の森美術館、そしてこれからご案内申し上げる国立西洋美術館が点在てんざいしています。国立科学博物館や、隣接りんせつする東京藝術大学の構内には東京藝術大学大学美術館もありますね。

一つの公園内にこれだけアート関連の施設が林立りんりつしているというのは、世界的にも例がありません。

観られる作品の幅が広いのも特徴です。土偶どぐうやミイラ、国宝の雪舟せつしゆう、葛飾北斎かつしかほくさいや写楽しゃらくといった日本の名品から、ルノワールやピカソら西洋の名画まで。これらをまとめて目にすることができます。なんとも貴重な場ですよ」

話に聞き入るあいだにも歩ほは進み、改札前の短い横断歩道をわたって、わたしたちはすでに上野公園の中にいる。

人は多いけれど、大きな樹木もたくさんあって、思わず大きく息を吸い込みたくなる。一帯は高台で見晴らしがよく、空気もこもらないのでいっそう心地いいのだという彼の説

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

明を聞きつつ、今日のお目当てだという国立西洋美術館にたどり着いた。

入口に立つと、広い前庭と、その奥には直線の目立つ矩形くけいの建物が見えた。

「直線を意識したこの建築、二十世紀建築界の巨匠きょしょうル・コルビュジエの設計でして、これ自体が巨大な作品のようなものといえます。さて、まだ想像しづらいかもしれませんが、このなかに、西洋美術史の全体が丸ごとぎゅっと詰まっておりますからね。さあ、まいりましょう」

先に立つ彼の背中が前庭へと吸い込まれていく。あわてて後を追うわたしは、そのときすでに、めくるめく西洋美術の世界へ足を踏み入れていたのだった。

I 前庭のロダンは、彫刻の「印象派」

国立西洋美術館の前庭に一步足を踏み入れたとたん、わたしは、西洋美術のなかでも重要な位置を占める作品と対面することになった。

「少しだけ立ち止まってみましょうか。庭の全体を眺め渡して、場の空気を読み取ってみてください。何か、感じることはありませんか」

そう促^{うなが}されて、まわりをゆっくり見てみる。すでにお客さんが何人か訪れていて、思うままあちらこちらぶらついていた。

動いているのは彼らだけ……、のはずだけど、何かがうごめいているような感じがするのはなぜだろう。その出どころを落ち着いて探してみる。と、視線は鈍^{にぶ}い光を放つブロンズ像に行き当たった。

「そうなんです、庭内には合わせて六体の彫刻作品が点^{てんざい}在しています。そのうちの五体は、

オーギュスト・ロダンの作品です。

硬いブロンズでできているというのに、まるで息づいているかのような彫刻ばかりでしょう。ぱっと見れば静止しているに決まっていますが、このブロンズの肉体の内側では、きつと鼓動が刻まれてにちがいない！ そう思ってしまうほど、どれも迫真の表現です」

ああ、これがぜんぶ、ロダンなんだ。もちろん名前は聞いたことあるし、いくつか作品も思い浮かぶ。たとえば……。

「あそこにあるのなんか、どうですか。きつと見覚えがありますよね。植え込みの向こう、肘をついてうづくまる巨大な人物像です。

あまりにも有名な《考える人》です。

大きな姿ですよ。あのかがんだ状態で高さ一八六センチあります。腿に肘をついた独特の姿勢ですが、なんともバランスよく調和がとれていると思いませんか。身体の全体がまとまった量感をもっているのも、遠目にわかります。

世界の彫刻史に名を刻む名品です。それが、上野駅を降りてほんの少し歩けばいつでも目にするのできるのです。うれしいことですね」

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

そして、こちらにも。話を継ぐ彼の伸ばした右手の先を見れば、生垣いけがきの緑に囲まれるようにそびえ立つ巨大な彫刻があった。

「ロダンが生涯を賭して制作した《地獄の門》じごくの門です。

一八八〇年にフランス政府から依頼を受けて制作が始まり、彼が没した一九一七年までずっと手元に置かれた作品です。当初は、新設予定の裝飾美術館に門扉もんびとして置かれるはずだったのですが、途中で美術館の計画自体が白紙になってしまい、ロダンにも制作中止のお達したつが入ります。

ところが彼はこれを拒否。制作途上の門をみずから買い取り、手を入れ続けたのです。巨大な門は、ロダンの創作への情熱を一身に受けながら長い年月を重ねました。わが子のような扱いだっただといつてもいいでしょう。この門に、いつしか生命に似たものが宿ったとしても、さほど不思議ではありません」

そうか、《地獄の門》は息づく壁のようなものなんですね。

「そうですね、ロダンの思いをたっぷり吸いこんでいますから。

ただし、ロダンの生前に《地獄の門》が鑄造ちゅうぞうされることはありませんでした。死後になつてから七つの作品が鑄造されていき、現在はフィラデルフィア、パリ、チューリッヒな

ど各地に完成品があります。

いまご覧になつてゐる門はそのうちで最も早い時期に鑄造されたものなんですよ」
そう聞くと、なんだかありがたみが増してくる。

それにしても《地獄の門》だなんて、ロダンは自作にすごいタイトルをつけたものだ。近づいて細かいところに目を向けてみれば、たしかに名前負けしない迫力はある。平和そうな上野の杜もじの一角に、じつは地獄への入口がある。考えてみるとおそろしい。

「ロダンはこけおどしでそんな名前を付けたわけじゃありませんよ。地獄の門という言葉には、由緒ゆいしょ正しい出典があるのです。

十四世紀初頭にイタリアの詩人ダンテが書いた長大な詩篇しへん『神曲しんきょく』。これに出てくるのですね。地獄篇れんごく、煉獄篇れんごく、天国篇と三つに分かれてゐるうちの、地獄篇第三歌かに記述きじゆがあります。

詩篇はダンテ自身が地獄を巡るといふ設定なのですが、その入口に門があり、

憂うれいの国に行かんとするものはわれを潜くぐれ

われを過ぎんとするものは一切の望みを捨てよ

そんな言葉が暗い色で門の上に刻まれてあつたといいます。門そのものが、ここから先は絶望を覚悟せよと語っているわけです。なんだかずいぶんこわい話ですね。

パリでの美術館建設計画を請け負い、想を練った彼は、ためらうことなく『神曲』に出てくるこの門を形にしようと決めます。当時においては、いや今だって、斬新そのもののアイデアだと思います。

ただし構想の初期段階では、ロダンの頭のなかには一応、お手本とすべき先行作品がありました。イタリアのフィレンツェ洗礼堂にある、ギベルティの《天国の門》です。

ギベルティは十五世紀前半、ルネサンス初期に活躍した彫刻家。均整の取れた作品を得意としていました。

ロダンも当初はギベルティに倣って、伝統にのっとりたバランスのいい作品を想定していたんですよ。

ところが、です。計画が具体性を帯びてくるにつれ、ロダンの作品はどんどん伝統的な秩序から離れていきます。彼の内面がそのまま形を取ったかのように生々しい造形が現れ、その分だけ規則性はどんどん乏しくなっていたのです」

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

たしかにこの門、あまり整然とした形はしていない。一步近づいて内部をじっくり見てみると、構成美のようなものはあまりない。それよりも、なんとというか、ロダン本人の情念がむき出しで形になったような、異様な迫力がある。

いくつもの人物像が、門内のここかしこに見えているけれど、どんなポーズを取っているのかすらよく分からなくなっている。まるでこの門の表面は煮えたぎるマグマで、あらゆるものが溶け込んでしまうかのよう。

「写実的な表現とは言えませんね。」

ロダンが写実を苦手としていたわけではありませんよ。ロダンは彫刻家としてずば抜けた造形能力を持っていましたから、やろうと思えばいくらでも「本物らしく」はできます。でも彼はそうした能力を、生き写しの人物像を造ることには使いませんでした。

それではいったい、どんな像を目指したのか。自分や、またはモデルとなっている人物の、心理や感情を表現できるようなものをこそ、ロダンは模索したのです。生身の個人と向き合い、徹底的に一人ひとりの内面を探ろうとしました。

《地獄の門》でいえば、そこに含まれているたくさんの人物像それぞれにロダンはしっかりと向き合っている。きちんと掘り下げて内面を探り、同時にこの巨大なオブジェ全体でも

一つの情念を表そうと考えていたようです。

具体的なモノを築き上げる彫刻という手段を用いて、形のない心理や感情を表現する。ロダンより以前に、そんな狙いを心に抱いた彫刻家はいませんでした。

近代というのは、思いきって要約してしまえば、あらゆる個人が個人として存在することが認められるようになった時代だといえます。

ロダンは彫刻によって、近代という時代の精神を形にしました。そういう意味で、まさに『近代彫刻の父』と称しょうされるにふさわしい存在ですね」

個人の心理や感情。それは揺らめいていて、捉とらえどころのないものだろうと思うけれど、なるほどロダンはそういう形のないものに、なんとか形を与えようともがいていたわけだ。『地獄の門』とこうして対面していると、なんだか割り切れない感情が湧わきおこってくる。それはロダンの創作態度からすれば、当然のことなのかな。

そこには教訓や、「作品から読み取るべきこと」がはつきりあるわけじゃない。ここから何をつかみ取るかは、見る側であるわたしに委ゆたねられている。わたしという個人の内面が問われているみたいで、ちょっと緊張する。

「ロダンは一八四〇年生まれ。一九一七年に亡くなるまで、彫刻家としての生せいを全まっうしま

した。彼の活動時期は、芸術上の大きな変革期と重なります。十九世紀後半、これは印象派という一大潮流ちやうりゆうが台頭したところです。

印象派については、この美術館の中で多数の実例を目にすることができ、その際にどれほどこの芸術運動が革命的だったかご説明します。いまは印象派とロダンに共通の一つの特徴だけ申し上げておきましょう。

彼らは、作品のうわべの完成を追うことはあまり考えていません。いかに表面をうまく仕上げるかではなく、それよりも、自分の作品にどんな内面を反映させられるか、そしてそれが見る側にどんな効果を及ぼすか、そのあたりを深く、深く探求していたのです。

ロダンの創作上の冒険はまだありますよ。《地獄の門》の最上部を見ていただきましょうか。三体の人物がくっついていきますね。これは『**三つの影**』と呼ばれていて、それぞれまったく別モノに見えますが、じつは三人の男性像はすべて同一のもので、角度が違うので異なる像に見えているのですね。

まさか手抜きをしたというわけじゃありません。ロダンはここであえて同じ像を反復させているのです。

思い出してください、これは地獄の門なのです。

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

地獄とはおそらく、わたしたちが日頃感じている時間や空間とは別の原理によって支配されている世界。その入口たる門なので、同じ人物が同一空間上に繰り返して現れても何ら不思議なことはありません。

自分の作品世界において、ロダンは時間と空間というものの意味を問い直しているようでもあります。

一つの作品の中に同一のものを反復させる手法は、二十世紀に入ってからポップアートというジャンルのアーティストたちが盛んに用いたものです。マリリン・モンローのカラーな肖像を何枚も並べたアンディ・ウォーホルの作品などを、目にすることがおありじやないでしょうか。

ウォーホルは非常に過激な芸術上の実験を繰り返した人物とされていますが、それに先立つこと半世紀以上、ロダンはすでにポップアートの思想や方法を試みていたのです。

この国立西洋美術館のすぐ奥には、国立科学博物館があります。広大な展示施設内に、あらゆる分野の科学的成果が示されています。そうした施設の手前に、ロダンの作品が置いてあるというのは象徴的です。

科学技術を生み出し、発展させる原動力となったのは、実験精神、合理精神、技術と人

間を融合ゆうごうさせんとする思想です。それらの要素を、芸術作品の中に凝縮ぎようしゆくして見せてくれた最初の人物の一人、それがロダンなのですから」

II 館内で、いちばん古い絵

ロダンの迫力に圧倒されっぱなしで、庭を抜けて建物へ入ったときには早くも頭がぼうつとしていた。陽射しも強かったし。でも、ひんやりとした影に包まれたらもうだいじょうぶ。館内に満ちている落ち着いた空気が、気持ちをやわらげてくれた。

ふと見ると、常設展の入口が示されていた。

館かんの所蔵品を置くために用意された場所が、常設展示室。ここにこそ、西洋美術の歴史が丸ごと詰まっている、ってことなんですね。

ふたりでそろって歩を進める。

最初の室しつには、ロダンの彫刻がところ狭しと並んでいた。もうすっかりおなじみの作家だという気がしてくる。

立ち並ぶ彫刻群のあいだを縫ぬうようにして、しばし自由に回遊してみる。どの角度から

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

でも見ることができるのは、彫刻作品のおもしろさだなと思う。

小さいサイズの《考える人》も展示されている。こんどはさつきよりもずっと近くまで寄れた。真正面から彼の表情とポーズを、じっくり観察してしまった。

「上にもたくさん作品が待っていますよ」

そう促され、スロープで二階の展示室へと上りながら、彼は話を続けてくれる。坂道を歩きながらでも、少しも息を乱さず言葉を発するのがいいと思う。それに、この声を聞きながら歩くと、なぜだかすっかかり安心してしまう。

並んで歩いているはずなのに、少しだけ後ろのほうから声がするのは、スロープを上るあいだずっと彼が半歩、いや四分の一步ほど後ろを歩いているから。それで、ただ歩いているだけなのに、包み込まれるような感じがしてくる。そういうの、気分が悪いはずもない。

「ロダンを唯一の例外として、今日は絵画の歴史だけをたどっていくことにしましょう。

美術とは目で見て楽しむ芸術、つまりビジュアル・アーツのことを指しますね。立体や映像などいくつものジャンルに分かれる美術のうちで、中心を担うのはやっぱり絵画ですからね。

絵画の歴史はとても長いものですが、ちなみにその起源って、どのあたりにあるかご存じですか？」

ん、ちょっと壮大な話すぎてなんとも……。あ、でも、歴史の教科書で見た覚えがある。大昔の人が洞窟の壁に絵を描いたりしていますよね。ラスコーとか、いろいろ。

「まさにそうです。絵を描くというのは、人が言葉を使いはじめたのと同じくらいに古くからある行為。当時の記録なんてないので、ずばりいつからだと示すことはできませんが、人類の歴史とともにあるといつていいくらいのもんです。

こんな話もありますよ。

古代ローマ時代のこと、あらゆるものごとを書き記そうと、『博物誌』なる大著を書いた人物がいました。プリニウスという学者です。彼は著書の中で、絵画がどう生まれたかについて伝えています。

いわく、かつてある都市で、若い娘が恋する相手と離れ離れになろうとしていた。男性が遠い地へ出かけて行かねばならなかったのです。娘は男性の面影をなんとか自分のもとに留めたいと強く願い、思いがけぬ行動に出ます。地面に映った彼の影をなぞって、輪郭線を描き出したのです。

その像を、彼が遠くへ去ったあとも大事に、大事にしたといひます」

つまり絵画って、有史ゆうし以来ずっとあるものなんですね。

人が誰かを思ったり、何かに心を動かされたりしたときには、その気持ちを表現するためまっ先に使われてきたものでもある、と。

「そういつて差し支つかえないでしょうね。そこまで考えると、絵というものの範囲はとてつもなく広くなります。そのすべてを、午前中だけで見て歩くのはちよつと難しい。そこで今日のところは、いわゆる『西洋美術』という枠組みで、しかも現在の美術とつながりのあるものを見ていく、ということにしておきましょう。

ときに、西洋美術の絵画と聞いて、まず思い描くのはどんな作品ですか。ピカソの大胆だいたんな人物の絵だったり、ゴッホの自画像なんかでしょうか。または、水に揺れる睡蓮すいれんを描いたモネら印象派の絵でしょうか。それとも、永遠の微笑をたたえるレオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》ですか？」

たしかにそのあたりの絵は、まっさきに頭に浮かぶ。あと西洋画といえば、たとえば教科書で見た記憶があるのだけれど、勇ましいナポレオンの姿や、マリー・アントワネットが堂々と胸を張る肖像画なんかも「いかにも」だなと思う。

他には、暗闇の中から人の顔が浮かび上がってくるレンブラントとか、絵が来日するたび話題になるフェルメールなんかも。

「ええ、ナポレオンは、白馬にまたがっている絵でしようかね。それでしたら、ジャック・ルイ・ダヴィッドが十九世紀初頭に描いた《サン＝ベルナル峠を越えるボナパルト》です。すね。

マリー・アントワネットの肖像を多く描いたのは、十八〜十九世紀にかけて人気を博した女流画家ヴィジェール・ブランです。

レンブラントとフェルメールは、ともに十七世紀オランダの画家。

ピカソは二十世紀に生きた人で、レオナルドの《モナ・リザ》は十六世紀初頭の作ですから、いま挙げた作品と作家は十六〜二十世紀のあいだにみんな収まりますね。

そう考えていくと、いわゆる西洋画といわれてピンとくる作品が生まれた年代は、どのあたりまで遡れるのでしょうかね」

いかがです？ と目顔で尋ねられ、はてどうだろうと考えてみる。

レオナルド・ダ・ヴィンチはたしかルネサンス時代の人。ということとは、彼といつもいつしよに名前が出てくるミケランジェロやラファエロはどうだろう。うん、どっちもピン

とくる。ミケランジェロといえ、ヴァチカン市国のシステイナ礼拝堂に描かれた《天地創造》があるし、ラファエロは愛らしい聖母子像が思い浮かぶ。

ルネサンス時代の絵は、だいたいオーケーみたい。じゃあその前は？ ルネサンスの前となると、時代は……、中世ということになるのかな。中世の絵画ってどんなのだろう。あまりイメージが湧かないな。今につながっているかどうかという以前に、そういえば、知っている中世の絵ってほとんどない。教会に掲げられていたりする、あまり写実的とはいえないイエス像がおぼろげに浮かんでくるくらいかな。

考えてみればそういう絵は、人物の表情が固くて画一的だし、ポーズも決まりきったものばかり。遠近感もあまり考えられていない気がする。キリスト教を篤く信仰していれば別なんだろうけど、絵として親しみやすいとはとてもいえないな。

そうか、じゃあやっぱり、今につながる西洋絵画はルネサンスから始まったということ、どうですか？

「そうですね。大正解だと思います。ルネサンスから現在までの西洋絵画は、さまざまな変遷を経ながらも、ひと連なりの歴史を形成していると考えていいでしょう。

ルネサンスというのはおおむね十五〜十六世紀に、イタリアの諸都市を中心に湧きおこ

った大きな芸術潮流です。最初のルネサンス絵画と目されるものはいくつもありますが、ここではその一つとして、マザッチョの《楽園追放》という作品を挙げておきます。一四二五〜二七年のあいだに描かれたものです。

絵のテーマは、聖書の中でおなじみの人物たるアダムとイヴ。ふたりが、禁断のリンゴの実を口にして神の怒りを買ひ、楽園を追い出される場面を描いています。

神のもとを去るアダムとイヴの二人は、いかにも悲しそう。とりわけ、イヴの嘆きようといったらありませんね。観ているこちらでも思わず同情したくなります。

そう、このように絵画で感情を表現するというのは、ルネサンス絵画の大きな特徴です。それ以前の、少なくとも中世の絵画には、こまやかな感情を表情やしぐさで伝えようという発想がほとんどなかったのです。

他には、人体をまるで本物のごとく正確に表現すること。また、ものに影をつけるなどして立体感と奥行きをつくり出すこと。そういうポイントがルネサンスの要素として挙げられます。

《楽園追放》は、すべて満たしていますね。だからひと目で、いかにも西洋絵画だという

美術作品の権利上の都合により
Web掲載不可。
本をご覧ください。

感じがするわけです」

感情表現、正確な人体描写、奥行き。どれもわたしたちからすればあたりまえのことのように思えるけれど、そうじゃないんだ。どこかで誰かが発明して、その後、受け継がれてきた表現方法なのか。

「ルネサンス期にこそ、現在へとつながる発見や発明が相次いだということですね。なので、マザッチョあたりから現代までを、ひと連なりの西洋美術の歴史と捉えていいのだと思います。」

ただ、わたくしとしましては、もう少しだけ範囲を広げたいところなのです。といいますが、現代に直接つながる美術とそれ以前を、くつきりと分ける一つの原理があるのではないかと考えるからです」

現代に連なる美術とそれ以前を分けるもの。なんだろう。

彼は「そういうのはいろんな説や考え方があるかと思いますが……」と目を伏せ前置きしてから、やおら顔を上げてこちらを見据えながら言う。

「ここはわたくしの見立てで申し上げてよろしいでしょうか」

もちろん、との意を込めてゆっくりうなずくと、少しうれしそうに口元を綻ばせながら

彼が続けた。

「作者がいる、ということですね」

作者？ 作品がそこにあるからには、それは誰かの手によってつくられたということでしょう。作者は常にいるものなんじゃないのかな。

「それはそうなのですが、作者の名前が作品とセットになって伝わっているというのは、中世以前にはなかったことなのですよ。」

先史時代の洞窟壁画や、ギリシア・ローマ時代の彫刻、中世の教会に施された彫刻に、作者の名は伴っていませんでしょう。あの作品をつくったのはこの人と、後世にまで伝わるほどつくり手の像がくつきりしてくるのは、中世より後のことです。

現在のわたしたちがイメージする芸術家像というのは、やはりルネサンスの三巨匠、すなわちレオナルド、ミケランジェロ、ラファエロが原型になっているとっていいでしょうね。

でも、作者という立場のはじまりは、彼ら巨匠たちに先んずること二百年あまり。フィレンツェにいたひとりの人物に帰せられるのです」

わたしたちが思う芸術家像、そののはじまりの人とはいったい誰なんだろう。

「彼の名はジョット・デイ・ポンドーネ。わたくしたちが考える芸術家という存在の歴史、また絵画の歴史は、この人から語り始めていいでしょう。」

一二六七年ごろ、フィレンツェ近郊の村で生まれた彼は、幼いときから絵の才能を示して村の人々にかわいがられました。早くからフィレンツェへ出て頭角を現し、各地で教会壁画などを描きました。

建築を手がけたりもしていますよ。大きなドームを頂いてフィレンツェの象徴としてそびえる大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレには、寄り添うようにして鐘楼が建っています。あれはジョットの設計によるものなんです」

ああ、わたし、そこなら行ったことがある。

学生時代のイタリア旅行でフィレンツェを訪れて、大聖堂の屋根まで階段で上った。夕焼けに染まる街並も美しかったけれど、間近に見える鐘楼の伸びやかな模様に目を奪われた。崇高さや神聖さとともに、親しみも感じられて、この建築が街の雰囲気象徴しているように見えた。

「崇高さを保ちながら、身近に親しめる感じも漂っているというのは、まさにジョットの作風そのものですね。なんとというか、作品を享受する人たちのほうを向いているという

か。彼は、観る人のことを意識して創作をしていたはず。そういう態度は、彼以前の時代にはなかつたことなのです。

美術は、神に捧げるものだったり、神の教えを伝えるための手段として考えられており、個人的な思いや情緒をそこに込めて届けるという発想はなかつた。

作品からにじむ親近感ゆえでしょうか、彼はずいぶん周囲に愛されました。同時代の人々は、みなジョットのことを自慢したのです。わが街にはこんな名人がいると、他の土地へ、また後世へ伝えようと思いました。

こんな逸話も残っていますよ。あるときジョットは、ナポリ王に招聘されて、当地で絵を描いていました。王がジョットに言います。もしわたしが君の立場だったら、今日はたいてい暑いから、絵筆をおいて休憩してしまいたくなるがね。

すると、ジョットは王に向けて言い放ちます。もしわたしがあなただったら、たしかに仕事をお休みしてしまいますけれど。でもわたしの仕事は休むわけにはいきません。

雇い主たる王に対して、混ぜっ返しながらものを言えるとは、よほど信頼を得ていたのでしょうか。機知に富んだ魅力的な人物であつたことも窺えます。

こうした話が伝わっているということは、よほど注目され、広く認知される人物だつた

ということも分かりますね。自分の名前です仕事をする芸術家という存在は、ジョットから始まったといえそうです」

美術における「作者」の誕生はルネサンスの直前にあり、ということなんです。それだけ時代を画す人だったということは、作品もよほど革新的なのかな。それまでの中世の作品と、どこが大きく違うんだろう。

「ジョットは何が違ったか。彼は、観察をしたのです」

観察？ ものをじつと見ること？ それだけ？

「はい、それが大きな転換点でした。彼は自然を観察し、そこから学び、模倣しようとしてしました。」

じつは中世においては、実物を見て描く写生しゅせいという方法は、すっかりすたれていたので。中世の絵画は基本的に宗教絵画であって、キリスト教の教えをよりよく伝えるための手段として考えられていました。

そのためには、目の前にあるものや自然を模倣してつくるのではなく、お手本たる「型」を正確になぞることが重要でした。宗教的な教えや聖人の姿を、つくり手が勝手にアレンジするわけにはいかないのです。個性を發揮する余地がない、というよりはそんな発想が

まずありませんでした。

ジョットはその慣習を打ち破りました。描いたのはもちろん宗教的な主題ですが、そこに登場する人物の表情、しぐさ、衣服のニュアンス、空間の奥行きなどを、実際の事物の観察を通して、みずからの感覚に基づいて描き出したのです。

パドヴァにある教会で一三〇五年ごろに描いた《哀悼》を見ると、人物の姿にはつきりと厚みを感じます。

衣服の襞のあいだに影が落ちて、立体感が表現されています。人物の配置も、手前には背中を向けてしゃがんでいる人、奥にはこちらを向いて沈痛な表情を見せる人と工夫しており、奥行きのある空間が構成されています。一人ひとりの表情も豊かです。

こうしたまったく新しい手法を駆使して、ジョットは一枚の絵を、まるで目の前で何かが起こっているかのように仕立てました。

それまでは、宗教的な教えを伝達するためのツールだった絵画を、リアルなものが目の前に立ち現れる装置にしてみましたのです。

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

写真という表現の手法、考え方が、ジョットによって築かれたのです。

いえ、人類で初めてジョットが写真をしたというわけではありません。古代の美術には写真の考え方がちゃんとありました。が、中世には、そうした美術のあり方が脇に追いやられていました。それをジョットが陽のあたる場所へ持ち出したわけですね。

場面をまるで本物のように描き出すには、観察に基づく写実的表現のほかに、描き手が自分の考えを煮詰め、想像力をたくましくしなければなりません。

いま描いているシーンで、この人物の気持ちはどんなものだろう。どういう表情をしているのが最も自然か。着ている衣服はどのようなもので、手触りや質感はどうか。どんな位置に立たせるのが効果的か、などなど。思い描くべきことはいくらでもあります。

ジョットは、観察し、考え、そして想像したのです。そうして、この世界をどう画面に定着させようかと模索した。

この精神の働かせ方こそ、いまも変わらず美術に携わる者がおこなっている営みそのものです」

そうか、ジョットこそ、最初の芸術家。そう言えそうですね。

となると、ジョットの絵がますます観たくなるけれど、この館で出会えるのだろうか。

話しているうちにとくにスロープを上り終え、二階の広々とした空間に到着していた。展示が始まる入口にいたるのだけど、いきなりジョットの絵と対面できる？

「そうだといいのですが。残念ながら、この館にジョットの作品はありません。というより、日本にジョットの絵は存在しないのです。

観るならば、どうしてもイタリアまで足を運ばねば。機会がありましたらぜひどうぞ。

その節はもしもお呼びいただけますれば、もちろん現地で解説もいたしますよ。

ジョットはありませんが、ここに同時代の絵がありますから、そこから観ていきましよう」

そう促されて向かい合ったのは、小さな縦長の絵画。槍やりを持って戦いの装束しょうそくに身を包んだ人と、その足元には小さな生き物。これいったいなんだろう。

「龍りゅう」です。少し弱そうですね。十四世紀に描かれた《聖ミカエルと龍せい》と呼ばれる作品。描き手ははっきりとしませんが、イタリア・トスカナ地方の都市シエナで活動したシエナ派の画家の手になるものとされています。

この館で最も古い一枚がこれです。ジョット以降からひと連なりの西洋美術が続いているという歴史認識は、同館でも採用されているようですね。

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

絵柄は、聖書の黙示録もくしやくの一場面を描いたものです。天界で戦争がおこなわれた際に、聖ミカエルは龍をやつつけて、地上に落としたというお話があるのです。

龍を退治する聖ミカエルの、なんとりりしいこと。多少、躍動感に欠けていてぎこちなく思えるでしょうか。でも、このワンシーンを迫真性を持って表そうという気概きがいは伝わってくる気がしませんか。

聖ミカエルの首から顎あごにかけてのラインは、緑がかった色で陰影がついていて、立体感と表情を出そうとしているのでしょうか。

ただ、背中から生えている羽などは立体感を出す方法が確立されていない感がありますね。人物像のプロポーシオンもアンバランスなところがあるし、左足や左手がどう交差しているかも整理されていない。じっくりものごとを観察することに、まださほど慣れていないといったところなのではないでしょうか。

それに、この龍。聖ミカエルに比ひして思いのほか小さくて、情けない顔。これじゃあ簡単に退治されてしまつて当然ですね。

それにしても愛嬌あいきやうがあります。そんなところが凶らずもこの絵の魅力の一つになっているのではないのでしょうか。

金色がベースの背景は華やかで、楯たてや鎧よろいには細かい装飾が描き込まれていて美しい。最初の芸術家ジョットの作ではなくとも、この館で西洋美術の旅を始めるのにふさわしい一枚だと思います」

この先にも、たくさんさんの絵画が待ち受けていますよ。進みましょうか。

そう言いながらさっと差し出された彼の左手に導かれるように、次なる作品との出会いへ向けてわたしは歩きはじめた。

III 「自由」を謳歌する二十世紀絵画

ん？ 館内の案内表示によれば、ここは右側に進むとある。それなのに、彼は自信を持って左手に回る。

あの、順序が違うんじゃない……。

「ええ、今日は館が勧める巡り方をやめて、ここから逆回りに行ってみましょう。

この館では、先ほどの十四世紀シエナ派の絵画にはじまり、時代を追っていく形で作品が並べられています。じっくりと観ていくならば、それをたどるのももちろんいいでしょう。でも、今日は午前中のみで全体を観てみようというのですから、多少の急ぎ足が必要です。となると、時代を遡ったほうが分かりやすいはずなのです。

現在から過去へと眺めていくと、歴史の転換点、因果関係、後世に真に影響を及ぼしたのはどの作品なのか、そういったことがかなりはつきりとしてきます。ポイントが、明瞭

になるのですね」

そう言いつつ、案内表示とはまったく反対のほうへ誘導された。階段を下りて、角を曲がる。さりげなく前に出した彼の左手に促されて、展示室へ入ったとたん、目の前がぱあっと明るくなった。

天井が高く、照明も室内の全体に行きわたっているから、空間がずいぶん開放的に感じられる。でも、それだけが理由じゃない。壁にずらりと並ぶ作品が鮮やかで、色とりどりの華やかさを持っていて、展示室全体を湧き立つような雰囲気染めている。

「この部屋に入ったときの印象、いかがですか」

そう問われて、思ったままに、あふれんばかりの色と形に圧倒されたと伝えると、

「そうですね、まさにそれがこの時期の美術の特徴といえます」

通常の順路でいえば、ここはいちばん最後の展示室にあたる。

天井の高い空間に繰り広げられているのは、二十世紀になってつくり出された作品群だ。自分の生まれた世紀でもあるから、あまり客観的に考えてみたこともなかったけれど、ずいぶんパワフルな時代だったのかな。

「そうです。眺めてみれば、誰ひとりとして同じことをしていないのがよくわかります。

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

この室だけでもたくさん作品が並んでいます。皆それぞれ好きに描いていますよ。自分が選んだり、または編み出した手法によって自在に絵ができています。この時代は、何よりも個性の発露はつろこそが求められているのです。

まとまりがないと言われればその通りですが、それはそれでいいのでしょう。画家たちがこんな自由を謳歌したのは、二十世紀が初めてです。

芸術家はいつだって自由な存在じゃないのか、ですか？ そうですね、自由を求め、独自の道を歩もうとする姿勢はいつだって忘れていないと思います。

とはいえこれまでは何らかの流派があり、時代の流れがあり、その時々によってさまざまな制約がありました。二十世紀のように、ひとりにつき一流派といったことにはならなかったのですよ」

そうか、無条件に自由だなんてことはないというわけだ。

「ジョットの時代から何世紀にもわたって画家たちが追い求めてきたのは、一つには、ものをありのままに描くこと。いかに自然の似姿にすがたをつくれるか、ということですね。

もう一つは、理想的な美の追求。

西洋美術の世界には確固たる規範があつて、それに沿っていかに見事な表現を築き上げ

るかが勝負でした。つまり、描くべきテーマや目指すところは、いちおう暗黙の約束事として決められていたわけです。

ところが、二十世紀はそうじゃない。そうした規範は、いったん二十世紀初頭に崩れ去ってしまいます。

それで二十世紀の画家たちは、主題からして自分で選ばなければならなくなった。手法ももちろん、工夫して編み出さないといけない。オリジナルであることを強く求められるというのは、たいへんなことだと思います。

この室に入ったときに感じる華やかさと混沌は、まさに二十世紀絵画の特徴といっているでしょうね。

それに、歴史として整理されるには、時間が短すぎるということもあるでしょう。二十世紀の画家がさまざまに試みた実験は、まだその効果や成果がはっきりとは明らかになっていない。もつと時間が経てば、彼らが為した^な冒険についての客観的なレポートが積み重なって、評価も定まってくるのだと思います。

歴史がどんなジャッジを下すのか、ぜひ知りたいところですが、それは残酷な^{ざんく}ことでもあります。今は巨匠として扱われている画家でも、ひよっとすると数十年後には大きく評

価を落したり、名を聞かなくなっていることも考えられますからね」

混沌が残る、でもだからこそ強いエネルギーが渦巻く作品群の中に身を投じてみよう、展示室の中心に立ってみた。壁に掛かった絵を、改めてゆっくり見渡してみる。個性の洪水を全身で受け止めるような気分。

その中でとくに眼を惹きつけられたのは、大きな赤い丸が描かれた巨大な絵画。

画面には何一つ具体的なものなどなくて、ただ不思議な色と曲線ばかり。画面の中心近くにある不格好な赤い色面に、わけもなくしばし見惚れてしまった。

赤色にじっと集中していると、眼の端に違う色が浮かんできた。錯覚かと思ったらそうじゃない。左下には一回り小さな青い丸が描かれていて、「こっちも見て」と訴えかけているかのよう。

美術作品の権利上の都合により
Web 掲載不可。
本をご一読ください。

それで赤、青、また赤と交互に色を見ていく。背景のグレー、その途中にある黒いラインも含めて、色と形を眼で追うことが、なぜかとても快い。バランスがいいのかな。眼を往還おうかんさせていると、そこにリズムが生まれて、絵の全体が動き出す錯覚に見舞われる。まるでカーニバルが繰り広げられているように、色と形が躍りおど出てくる。

「ジョアン・ミロの、その名も《絵画》という作品です。一九五三年に描かれています。具体的なものはそこに何もなく、形を成しているのは象徴的な記号のようなものばかり。いわゆる抽象絵画といえましょう。」

とはいえミロの場合、頭の中で抽象なるものを勝手につくり上げるのではなく、彼がいとも慣れ親しんだ大自然から着想を得ています。

おそらくこの絵の赤い丸は、太陽のような天体を描いたものなのだろうと思います。だからでしょうか、具体的なものが出てこないのに誰でもとつきやすい雰囲気があるのは「実際に人の背を超えるほどのサイズなだけで、画面が大らかで親しみやすく、よりいっそう絵が大きく感じられる。」

「抽象的なのに温かみにあふれる、愛すべき作品をたくさん残したのがミロです。」

彼はスペイン・カタルーニャ地方の都市バルセロナで、一八九三年に生まれました。地

元の美術学校を出ると、芸術の都みやこパリへ出ます。当時のパリでは、文学者アンドレ・ブルトンが中心となって、新しい芸術運動『シュルレアリスム』が産声うぶごえを上げていました。

超現実主義と訳されるシュルレアリスムは、文芸や美術の分野で大々的に展開された潮流です。人の想像力を解放して存分に羽ばたかせるために、偶然性や無意識を利用したり、思いもよらないもの同士を組み合わせる手法などを使い、新鮮なイメージを得ようとした。

単に日常を送っているときでは見えないもの、現実の先にあるものを見ようというわけですね。

その理論に基づいた絵画作品も多く残されました。

荒涼こうりょうたる風景の中に置かれた時計がぐにやりとねじ曲がっているダリの《記憶の固執こしゆつ》や、地面に置かれたブーツの先が人間の指に変化しているマグリットの《赤いモデル》などがよく知られているでしょうか

たしかにシュルレアリスムって、よく聞く言葉。ダリやマグリットの代表的な作品もすぐに思い浮かぶ。あの不思議な絵は、想像力を自在あやつに操ることを意図してつくられたものだったんだ」

「そうです。ふだんは自分の意識の下に隠れているものを、さらけ出してしまおうとしたのがシュルレアリスム。そうしてあの怪しくも魅力的なイメージが出てくるようになったのです。」

これは時代の産物さんぶつでもありませんね。一九一四〜一八年に巻き起こった第一次世界大戦。欧州を中心に多大な被害を出した戦争は、それ以前からしばらく社会を支配していた科学・理性らいてん礼賛らいさんの潮流うっせきに一石を投じました。

合理的なことばかりを信奉するだけでは、人間は誤りを犯してしまう。コントロールできない無意識の領域をもっと探っていけば、人間性を獲得し直すことにつながるんじゃないかとシュルレアリストたちは考えたのですね。

ミロもこうした時代の流れに連なり、シュルレアリスムの主要なメンバーの一人となります。主宰しゅざいのブルトンは一九二四年に運動の旗印はたじりしとしてシュルレアリスム宣言を発表するのですが、ミロはここにも参加者として名を連ねます。

そうしてミロは、ふだん目にする現実を軽々と超えていくような、不思議なイメージを次々と生み出していきます」

たしかにこの《絵画》を観ていると、小さな子どもが無心に描いたみたいでもあって、

自由な想像力が画面を覆^{おお}っているように感じられる。

シュルレアリスムというのはずいぶん知的な運動だったようだけど、ミロにはあまり流派なんかには捉^{とら}われない自由さ、伸びやかさがあつて、そこに好感が持てる。そう、どこか大自然を目の前にしているような感触があつて。

「ああ、そうですね。ミロ作品の美点は、決して頭でっかちじゃないところ。シュルレアリスムの重要メンバーだったとはいえ、彼は現実、とりわけ自然を眺めるところからすべてを始めました。

故郷カタルーニャ地方の野山、太陽、月、星などをモチーフにとり、天真爛漫^{てんしんらんまん}な態度で自然を称賛^{しょうざん}しながら描き続けました。現実にある多様な形をもとに、それを研ぎ澄^すましていくことで、詩的なイメージを生み出していったのですね。

自分の外界に広がる自然からまずはすべてを学びつつ、想像力を駆使して理想とする美の世界へ羽ばたいていく。

二十世紀の絵画はフランスのポール・セザンヌの大きな影響から出発して発展していききました。ミロの絵画は、セザンヌのやろうとしたことをさらに推^おし進めたものだったといえるでしょう」

ああ、セザンヌ。あのリンゴや、故郷の山並を繰り返し描いた人。でもセザンヌって、いつもものすごく具体的なものを描いているんじゃないの。あまり訳の分からない絵という印象はないけれど。

「たしかに彼が描いたのは、かなりふつうのものばかり。

アトリエに置いた果物、故郷である南仏エクス・アン・プロヴァンスにそびえるサント・ヴィクトワール山、自分の妻やアトリエの庭師を描いた肖像画などもあります。絵を趣味とする日曜画家が手軽に選ぶ題材と何ら変わりませんね。

それなのに、彼こそが絵画における革新を用意したというのは、不思議だしおもしろいことです。

彼は外界を徹底的に観察して、そこから事物の構造を読み取っていきます。構造とは、本質と言い換えていいかもしれません。

枝葉末節しようまつせつは見ずに、リンゴの、山の、本質だけを描き出す。そうして、ふだん見えているリンゴや山とはずいぶん違った姿が、画面には現れてくる。

セザンヌはあらんかぎりの想像力を使って、この抽出ちゆうしゆつ作業をおこなったのですね。あ
る一つの方針のもと、自然を読み替えていくのです。

その姿勢こそ、後進こうしんの画家たちがセザンヌから学び、見習ったものです」

想像力という武器を前面に押し出して、それぞれの作品をつくり出していったからなのか、二十世紀の作品を集めたこの展示室が、こんなにバラエティに富とんでいるのは。だって内面の思いは、一人ひとり違うはず。いろんな作品ができて当然だ。

「ほんとうに多様ですね。この室には、マックス・エルンストの作品があります。彼もシユルレアリスムの流れを汲くむ画家です。

きらめく色彩が画面いっぱいに広がるのはボナールです。

同じく豊かな色合いがぶつかり合って、まるで音楽を奏かなでているように思えるのはデュファイですね。

繊細せんさいな線と透明感ある色彩で、白くて柔やわらかい肌を表現しているのは藤田嗣治つぐはろ。二十世紀前半のパリで人気を博はくした日本人画家です。

さらには、ピカソもあります。まるで子どもがさらりと画用紙に落書きしたような線で描かれた絵です。彼は生涯を通して美術上の実験を繰り返し、そのことごとくが二十世紀美術の流れを更新してきました。ここに掲かかげられているのは、数々の変遷へんせんを経てきた晩年の作品。絵を描くことを純粋に楽しみ、戯たわむれている雰囲気がありますよ」

ああ、自由だな。この部屋の作品を眺めると、改めてそんな思いが頭をよぎる。

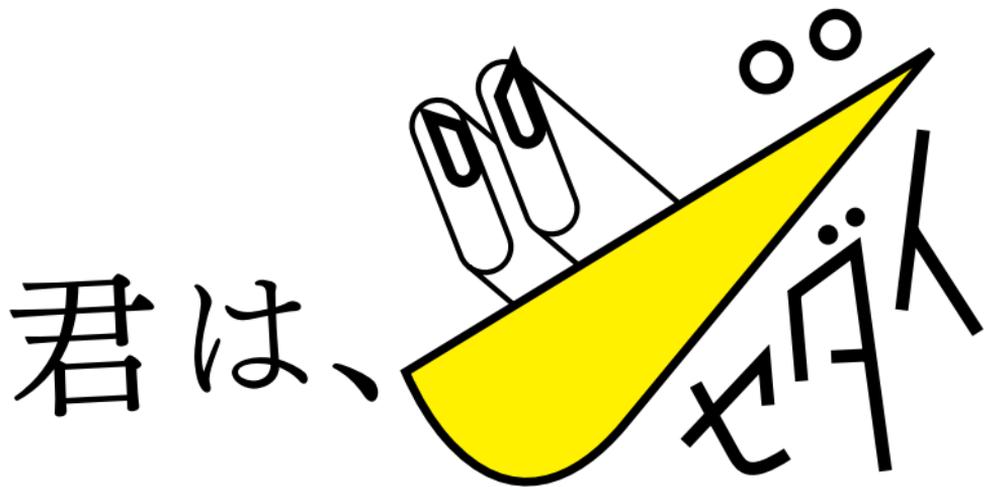
二十世紀ほど画家が自由を謳歌したときはないと教えてもらったけれど、そもそも自由を探し求めたり、獲得するための行動こそが美術、そういつていいんじゃないかな。

「まったくですね。個人が自由を確立しようという動きの一環、それを目に見える形で展開してきたのが、美術の歴史とっていいでしょう。」

世界史の大きな流れのうちで、人間の精神が発達する過程をいちばん分かりやすく示しているのが美術史なのかもしれません。そのための試行錯誤や悪戦苦闘は、延々と続けられてきたのです。

この展示室にある作品たちの源泉となったものは、必ず前の時代に見出せますから、今の感触を忘れないうちに、一つ前の時代の作品群に出合いにいつてみましょう」

こんなバラエティ豊かな絵を生む素となったものって、誰のどんな作品なのかな。二十世紀の画家たちにならって、想像力をフルに駆動させながら、次なる展示室を回ってみることにしよう。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ
イベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ニッポンのスタートアップ

3年後に再会することを約束して行う、未来アポ付きスタートアップインタビュー！

ジセダイジェネレーションズU-25

彼らはどうやって「闘う相手」を見つけたのか。各界の超新星に、その軌跡と未来を聴く。

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!